

『浄土の観念』における批判の射程

東 真 行

『浄土の観念』は、清沢満之以降の真宗教学を代表する一人である、金子大栄の講演録である。『浄土の観念』が一体何を批判したのかを本論は考察する。第一に『浄土の観念』を概観し、第二にその批判内容をみる。最後に『浄土の観念』の背景にある状況をみたい。

『浄土の観念』は、三通りの浄土観を示す。観念の浄土、理想の浄土、実在の浄土である。観念の浄土とは、「見えないけれども見えるもの、根本となつている」(浄・三五頁)浄土である。理想の浄土は、「あるべき世界を画き出してさういふ世界であらしめたいといふ理想として説き現はされたる浄土」(浄・三六頁)であり、実在の浄土は「どこかに本当に浄土といふものが実在して居つて吾々はそこへ往くのだといふ風に説き現はされたる」(浄・三六頁)浄土である。詳説すれば、観念の浄土は現実の仏法僧の背景となり、この三宝を支える不可視の真実そのものである。この観念は理想として志向されるには、余りに現実と隔絶している。そのために実在の浄

土としては説かれない。理想の浄土とは自己と他とを清浄としていく菩薩の理想としての浄土である。自己を内省して清浄にしていくと同時に、他をも浄化していく浄土である。実在の浄土は、その理想の浄土の完成したか、或いは完成の途上にある世界で、この世界に存すると想定される浄土である。たとえば、ある菩薩が自らの「理想の浄土」を樹立せんとする。この菩薩は先人が既に建立している「理想の浄土」として実在する浄土への往生を願う。この菩薩の念願は、その存在が想定される先人の「実在の浄土」での永き修行を経なければ到底自らの浄土を建立できないからである。しかし凡夫がこの実在の浄土に往生せんとすれば、此岸と彼岸の対立が鮮明になるばかりで遂には絶望に墮すると金子はいう。この「絶望」は自己への絶望であり同時に真理への目覚めでもある。この「絶望」によって此岸と彼岸との超えられない断絶が明らかになり、「実在の浄土」は真の意において「観念の浄土」として再帰的に受けとめなおされる。実在の浄土に往生する

『浄土の観念』における批判の射程（東）

事も絶望的であるから、凡夫にとっては自らが建立せんとする理想の浄土も実現し得ず、観念の浄土とならざるを得ない。三通りに示された浄土観は一つ、つまり観念の浄土に収斂する。宗門で問題視されたのは、実在の浄土について語る際の「実在の浄土は信ずることが出来ない」（浄・一〇五頁）といった発言である。

然るにその中〔引用者注『浄土の観念』に、「実在の浄土は信ぜられぬ」といふことを申しました（それが特にこの度の問題となつたのですが）〕のは、教法の指示する実在観念を、常識の見解に依る実在観から簡ばうと欲ふたからであります。：常識の見解に依る実在観は到底成立いたしませぬ。さればこそ反対に如来と浄土との実在を無視する、現代の常識の見解も生じたのでありませう。それ故に私は教法に依る実在観念を明かにすると共に、この常識の見解に依る実在観と、非実在観とを除去しやうといたしました¹⁾。

金子が「常識の見解に依る実在観」というのは教法を「教のまゝに」聞き、經典を根拠として浄土は「ある」と主張する事だが、そうした了解は常識的実在観に依り教法に依らない。金子は教条的な經典読解の姿勢を痛烈に批判する。

私は「¹⁾」昔から教のまゝに信じなさいと喧しく云つて居る人があ
るが、これは非常な問題だと思ふ：（浄・一三八頁）

どうも書いてある通りといふのは口真似ではいかん、口真似でなく
て書いてある通りといふことは恐らくどういふ事であるか：（如・

三九頁）

「教のまゝに」という態度の問題は、教えのままに聞法し語る事が釈尊の「口真似」に終始し、自身と釈尊とをいつのまにか重ねてしまふ点にある。そうなるると語る者と釈尊の区別はなくなるため、「教のまゝに」聞き語る者はいつしか凡夫という自己を忘れる。金子はこの点を批判する。さらに金子の批判は素朴実在論的信仰を他者に或いは先人において認め、自らの信仰の根拠とする、そうした信仰了解への批判へと展開する。

昔の人は西の方に浄土があるのだ、と本当に思うて居つたなどと定めてしまふのは少々危険なことでもあります。：念仏を称へてお浄土へ往くのだと云つて居るお爺さんお婆さんの心持の中にも十人の中人九人までは宇宙地図式に考へて居らうが、其の中の一人位は、言葉はさういふ言葉を使つて居つても其の心持はそれ以上に進んで居るかも知れない：少し真面目なお爺さんお婆さんになると妙なテカテカ光つた金銀瑠璃の浄土とは思つて居らない、さういふ点に於いて私はお爺さんお婆さんを尊敬するのであります。：たゞ昔の人は斯う書いて居るから此の通り思つて居つたのだと云つてしまふことは「¹⁾」私は昔の人を軽蔑し侮辱することになつて来はせぬかと思ふ
：（浄・三一〜三三頁）

素朴な信仰への批判とは、教学的表現に通じない者の信仰を教学的に批判し鞭打つ事ではない。「昔の人は西の方に浄土があるのだ、と本当に思うて居つた」と他者を評して、素朴

な信仰として仏教の浄土や如来といった観念をみて素朴である故に解釈を加えず解するを理想化する事、或いは素朴である故に切り捨てる事を金子は批判する。金子のいう観念の浄土は有無を離れた彼岸の世界であり、有るといふ實在観への批判だけでなく、無いという非實在観への批判をも射程とする。血肉となった信仰が、物語的な語りとして表現されるために素朴の烙印をおされ、深く省みられることなく「たゞ昔の人は斯う書いて居るから此の通り思つて居つたのだ」として素朴實在論的浄土の存在証明に使役されるか、或いは教法を単に非合理的な神話と見做すことの根拠として消費される。そのどちらもが「昔の人を軽蔑し侮辱すること」になる。金子が「観念」という言葉で確かめるのは、浄土へ往くという物語的な語りで表現される信仰の内実である。金子は「観念」を「生活の規範」とも表現する。

価値あるものは吾々の生活の規範となるものである。即ち法性真如である。それが生活の規範であるかぎり常住なものでなくてはならぬ。それは吾々の行く手に北斗星の如く輝くのである。それを吾々は「永久に未来にありて不生なるもの」と表象する。⁽²⁾

金子の師である清沢満之は浄土に関して積極的には語らない。清沢には「救済の現在性」という課題があり、それに生涯を賭したからである。

『浄土の観念』における批判の射程（東）

吾人は過去を回想し未来を追想するを要せず、現前一念を淨くするを要す。(此点よりすれば地獄極樂の有無、靈魂の滅否は無用の論題也)⁽³⁾

金子のいう「観念の浄土」は、この現在の救済という課題から浄土を捉えなおすものである。対照的に積極的に語らない意志を主張したのが野々村直太郎である。野々村の『浄土教批判』は、『浄土の観念』の元となった講演の一年前に出版され、金子は野々村を意識していたと考えられる。野々村にとっては浄土教の神話的表現は浄土教の宗旨を明らかにするための方便であるから、往生思想が表す内容は往生という言葉を用いずとも受けとめられる。往生思想が何を語ろうとするのかを問う野々村の問題意識は「若し所表現の文字をのみ固執するならば、それは唯だ書物を見るものであつて真に著者の言を聞くものでない」と⁽⁴⁾いった金子のそれと通じる。ただし野々村が神話的な表現がもはや現代においては役目を終えていると断定する事は金子から批判される。結局、野々村の論では浄土は「ない」と常識的に結論づけられる可能性を有するからである。指方立相の浄土を「ある」とすることも「ない」とすることも共に經典の言葉を常識的實在観で捉えている点は等しい。ここにもまた凡夫という自己の忘却がある。以上『浄土の観念』の批判内容をみてきた。金子は、浄土の教法を聞くときに自らに感得された内容を一聞法者である

『浄土の観念』における批判の射程（東）

凡夫として表現する。そこに、未生の境であり、生まれざるからこそ現生にはたらく「観念」としての浄土が見出されたのである。

- 1 「金子大栄『私の真宗学』の翻刻と解説（二）翻刻編」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第三〇号、一一七頁。
- 2 『彼岸の世界』『金子大栄著作集』第三卷、二六四頁。
- 3 『明治三十三年当用日記抄』『清沢満之全集』第八卷、四三六頁。
- 4 『親鸞教の研究』『金子大栄著作集』第三卷、一五五頁。

〈凡例〉 引用文中、読みやすさを考慮して「」内にて仮名を補い、一部の踊り字を仮名で表記する等の整文を行っている。

〈参考文献・略号〉

- 金子大栄『浄土の観念』（文栄堂、一九二五）↓浄
 金子大栄『如来及び浄土の観念』（真宗学研究所、一九二六）↓如
 金子大栄『金子大栄著作集』第三卷（春秋社、一九八二）
 清沢満之『清沢満之全集』第六卷・第八卷（岩波書店、二〇〇三）
 野々村直太郎『浄土教批判』（中外出版、一九二三）
 村山保史「金子大栄『私の真宗学』の翻刻と解説（二）翻刻編」
 （『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第三〇号、二〇一三、
 一一一―一二六頁）

〈キーワード〉 浄土、『浄土の観念』、金子大栄

（大谷大学大学院）

新刊紹介

小谷 信千代 著

真宗の往生論

親鸞は「現世往生」を説いたか

A5版・三八八頁・本体価格三、八〇〇円

法蔵館・二〇一五年六月